子ども会（学習会）だより
MY SKY No.19
マイ・スカイ
1997年９月30日火曜日発行(毎週火曜日きまぐれ発行)

発行者
板野中学校
学習会
編集・文責：吉成正士

☆ 修学旅行～気持ちは九州から北海道へ～

９月18日から21日まで，私は２年生と一緒に修学旅行へ行ってきました。私が中学生の頃と変わらず，行き先は広島，秋芳洞，長崎でした。まあ私が中学生の頃はハウステンボスもスペースワールドもありませんでしたから，代わりに熊本城や別府の地獄巡りに行きましたけどね。

さて，修学旅行の２日目にたまたま見たテレビで，ちょっとした感動やちょっとした回想をしましたので，そのことについて少し綴りたいと思います。その番組は「驚きもののき２０世紀」で，その日は「知里幸恵」という少女の１９年という短い生涯を特集していました。サブタイトルは「アイヌ民族に神が遣わした天才少女」でした。

明治時代から大正時代にかけて，北海道には多くの和人が本州から渡っていきました。新天地を求め開墾・開拓するためです。その中で，当時北海道ですでに生活を営んでいた先住民であるアイヌ人は，侵略を受け，人間としての扱いをされず，差別の中でどんどんどんどん追いやられ，居住区を奪われてきました。言葉についても，アイヌ語から日本語へと強制的に変えられつつありました。そのとき，

「自然と共に生きてきたアイヌ民族がみずみずしく豊かな感性で語り，
歌い継いできたアイヌの歌，ユーカラを正確にきちんと後世に残さねば」

という思いに駆られた金田一晴彦(国語辞典を作った人としてよく名前が出ています)が，当時の不便な交通事情にも関わらず研究をしていたときに，アイヌ人の家の一つで出会ったのが，知里幸恵でした。彼女の記憶力，理解力，語学力，感性は女学生の中でも群を抜いており，金田一氏に見いだされるとともに，１０代であるにもかかわらず彼の研究助手として翻訳活動を担ったのです。しかし彼女は生まれながらにして心臓病をもち，研究助手をするということは，自らの命を縮めることにほかなりませんでした。命がけの研究の結果，なんとかユーカラの翻訳はできましたが，そのすぐ後，彼女は二度と帰らぬ人となってしまいました。幸せな結婚をし，大好きな子どもを育てるという夢を叶えることもな

く‥‥。

「銀のしずくふるふる　金のしずくふるふる」

今でこそ環境問題が取りざたされ，自然と人間とのより良い共存・共生が声高にうたわれていますが，ずっとずっと昔から，アイヌ民族は自然を愛し，自然と共存してきました。単に雨が降るだけの光景すらも，彼女らの手にかかるとこんなにみずみずしく美しい詩に表現されてしまうのです。これも，自然と共に生き，豊かな感性を大切にしてきたからなのでしょうね。

実は私，高校３年生の時に北海道大学を受験しました。その時はアイヌ問題なんてまったく関係なく，天文学を勉強したくて受験したわけですが，受験に行く前ある人にこんなことを言われました。

「熊のような女の人連れて帰ってこられんじょ」

その時はこの言葉の意味がわかりませんでした。しかし今はわかります。あんなにステキな感性を持ったアイヌ民族の女性のことを，こんな言い方をして見下げていたのです。情けない限りです。

このような無神経な話は昔だけのことではなく，今もあります。現にこの夏，サッカーの講習会に出ていたとき，講師先生の話の中でこんな言葉が出てきました。

「欧米各国に比べて，日本は単一民族ですから‥‥」

こう言ってしまうことで，日本に住んできたアイヌ民族などの少数民族の存在を認めず，消し去ってしまうのであれば，やはりそれは同じ人間としておかしいことだと思うのです。またそう言えてしまう無神経さも許しておくことはできません。それもこれも差別問題に対する無知や正確な歴史観に欠けた結果だと思います。「人権の時代」と言われつつも，この言葉だけが先走りし，実際にはまだまだ，人権に対する知識や意識・関心は高まっていません。この講師先生も仕方ないことかもしれませんが，でも同じ教員としてやはり情けなさを感じました。

また知っておいてほしいことですが，１８９９年日本政府はアイヌ民族に対して「北海道旧土人保護法」を制定しています。アイヌ民族のことを「旧土人」と一方的・差別的にとらえたうえで。そして今年５月，約１００年の時を経て，完全なものではありませんがアイヌ人である萱野茂国会議員が中心となって訴えてきた「アイヌ新法」がやっと制定されました。萱野氏はそのとき「やっと『オレはアイヌ』と名のれる時代がきた」と思いを語っています。世代を越えた運動の成果ですね。

私は，北海道大学受験失敗後も２度北海道各地を訪れ，その雄大な自然を満喫しました。本当に雄大でした。自然の厳しさをよく知らず「移り住むことができればな‥‥」なんて思ったりもしました。その時はアイヌのことも知らずに旅していましたが，次に北海道へ行くときは，しっかりと北海道の歴史を勉強し，アイヌ問題を勉強し，体全身で北海道を感じてこようと思います。

《修学旅行についてもう一言》

旅行中，何回か聞いた言葉「バカチョンカメラ」。日頃の生活でも結構使い慣れている人がたくさんいるようです。ずっと昔，テレビコマーシャルの中で使っていた呼び方が，テレビという日本全国にまで広められるマスメディアを通して一気に広がったのです。このコマーシャルは差別的だということですぐに放送されなくなりましたが，その言葉の由来まではみんな知っているのかなぁ‥‥。

「バカでも『チョン』でも撮れるカメラ」

問題はこの「チョン」です。実は，韓国・朝鮮人のことを見下して言う，恥ずかしく，かつ憎むべき言葉なのです。「人間みな同じ」という見方ができていれば，こんな情けない呼び方はしないはずです。でもどこかで上下関係を作ろうとしているから，こんな情けないことを言うんでしょうね。しかも「バカ＝韓国・朝鮮人」と位置づけているうえに「でも」という言葉まで使って，さらに下に見下げています。なんというひどいことでしょう。もし私たちがこんな扱いを受けたらどう思うでしょう。言われる方はたまったものではありませんよね。それが，たとえ相手が知らずに使っていたとしても，悔しくて悔しくてたまらないと思うのです。言われる側の思いを知っていれば，この言葉は不用意には使えませんね。やはりこれも，「無知が差別をうむ」ということの一例だと思います。

私たちの生活には，こんな差別につながるようなことがたくさんあるのではないでしょうか。差別問題を勉強しながら，それら一つ一つを正していくことが大切なんでしょうね。なぜなら私たちは人間であり，より良い人間社会を後世に伝えていく義務があるからなのです。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

♪♯ ひとり・ゴッ ♪♭

先週の「同和教育・部落問題」勉強会で，松本治一郎の半生を描いたビデオ映画「夜明けの旗」を観ました。勉強になったとともにカンドーでした。部落問題を学ぶうえで，西光万吉や住井すゑさんは外すことができませんが，それと同じくらい，いやそれ以上に外せないのが，松本治一郎氏なのです。でも，結構知らな

い人もいるようなので，ぜひとも勉強してくださいね。

さてこの勉強会ですが，１０月からも時間や場所は変わりませんが，<u>第１・第３金曜日の夜のみ</u>となりました。学ぶ場がないとお嘆きの先生方，また保護者の方々，どうぞおこしください。なお来られるときは前もって，一言言いに来てくださいね。

★ ☆☆ ★★★ ☆☆☆☆ ★★★ ☆☆ ★

10月３日(金)　老人ホーム交流会(14:30～；板野町老人ホーム)
〃　「同和教育・部落問題」勉強会(19:30～；郡頭教育集会所)
５日(日)　丘のうえの芸術祭(13:30～；さくらホール)
９日(木)　生徒会役員改選立会演説会
13日(月)　臨時休校(統一大会)
14日(火)　板野町同和教育研究大会「小学校部会」(13:30～；板野東・西・南各小学校)
15日(水)　第４回板野中学校同和教育研究大会兼板野町同和教育研究大会「中学校部会」(13:30～；本校)

★ ☆☆ ★★★ ☆☆☆☆ ★★★ ☆☆ ★

お知らせ

以前ＰＴＡの会で話をしていたとき，「同和教育の会に行けるなら行きたいとは思うんだけど，いつあるのかわからない」と保護者の方に言われたことがありました。うれしいことです。結構他の町では，ＰＴＡや地域の方々も参加しているので，板野町もそうなればと思っていたのです。行ける方，興味ある方，ぜひ一緒に参加してみましょう！きっと何かが得られると思いますよ！詳しくは，中学校の阿部または吉成までご連絡ください。

10月14日(火)　板野町同和教育研究大会「小学校部会」(13:30～；板野東・西・南各小学校)
10月15日(水)　第４回板野中学校同和教育研究大会兼板野町同和教育研究大会「中学校部会」(13:30～)
10月16日(木)・17日(金)　第４８回徳島県同和教育研究大会(文化センター他)
10月18日(土)～20日(月)　部落解放第３１回全国集会(アスティ徳島他)
10月22日(水)　第２７回中学校同和教育研究大会(相生中学校)
10月24日(金)　文部省指定同和教育研究大会(三好中学校)
11月６日(木)　第４１回板野郡同和教育研究大会(吉野町)
11月29日(土)～12月１日(月)　第４９回全国同和教育研究大会(熊本県)

同和教育講演会録
『私の歩んできた道 ③』

世界選手権に参加するため、それからしばらくして日本を離れ、世界選手権会場となったエジプトのカイロ市に向かいました。ピラミッド、スフィンクスのすぐ近くの砂漠の入り口付近に、三階建ての世界選手権大会会場のビルが建っていました。一階からは拳銃の種目、二階からは100ｍの種目、三階からは300ｍの種目というふうに、ビル全体が射撃場になっておりました。その射撃場は、日本では考えられないようなりっぱな射撃場でした。撃った弾は砂漠のかなたに飛んでいくといった、日本では到底考えられないような施設でした。そこで世界選手権の大会を終え、それから三ヶ月間、ヨーロッパ七か国を親善試合をしながらずっと回って参りました。

三ヶ月後日本に帰り、そして次のオリンピックに向かって猛練習に入りました。世界選手権の時の自分の成績は、世界のトップレベルにまだ差のあるという厳しい体験や、一ヶ月間ドイツの射撃学校で学んだことを教訓にしながら、私なりの訓練方法で月日が流れておりました。

そうした訓練をする中で、ある日のこと私は、同僚の視線がおかしいことに気がつきました。今まで廊下ですれ違っても、お互いに手と手をパチッといわせながら笑い顔を交わし通り過ぎていた同僚が、廊下で出会っても視線を外へ向け、言葉を交わすことなくそのまま通り過ぎていく。私が部屋に入るなり、みんなが丸くなってしていた会話をパッとやめ散っていく。そういったことの繰り返しが行われました。私はおかしいなと思いました。

「体育学校で、トップをきって世界選手権に参加をしたことに対するねたみかなんかだろう・・・」

と気にしないように自分に言い聞かせておりましたが、そうではありませんでした。私の生まれ故郷が暴かれておりました。

「自分の生まれた小さな町から東京に出てきて、私を知る者はこの東京に誰もいない」

そう思い安心をしていた私にとっては、頭から水をかけられた思いでした。肉体的な苦痛に耐えるだけの自信は身につけておりましたが、そのような同僚の視線や私を取り巻く日常生活の中で、私に声をかけてくれない、私が声をかけようとしても適当な返事で去っていく、そういった同僚の態度に私はどうしてもみんなと一緒に訓練を受けるということが難しく思えてきました。

「転属をしよう。転属を希望しよう」

と思い、その部隊を後にして転属を希望しました。それが私にとって、新しい部隊に行って故郷が暴かれるとまた転属を希望するといった繰り返しになるスタートでした。

そして、大阪は伊丹の部隊に配属をされました。その部隊は昔でいう歩兵部隊で、第一線部隊でした。つまり射撃の盛んな部隊でした。その部隊で、私は射撃の教官として歓迎されました。

「いい部隊に来ることができた」

そういった安堵の中で訓練を重ねておりましたが、その部隊でも嫌な言葉にさらされました。日常生活の中でも、野山を駆け巡るテント生活の中でも嫌な差別の言葉にさらされました。私は、

「この部隊では長くいたい」

という気持ちがありました。ですから人の輪の中で同和問題の話になったとき、私はいつもみんなと一緒になって部落の悪口を言い、笑い飛ばしてきました。そんなことをしてしまった後、一人になったとき、何とも言いようのない自分に追いやられました。自分の生まれ故郷を裏切ってバカよばわりをしてしまった、そんな情けない自分に対して、父や母や弟たちを裏切ることで、自分の身を守るそんな方法しか知らない情けない自分に対して、何とも言いようのない自分に追いやられました。

そんな生活の中で私も年頃になり、そして自分の勤めているある上司の方から、

「見合いをしないか」

という話が持ち上がりました。そして松山のある女性と会うことができ、二回目会ったときには結婚式だったというふうに、とんとん拍子で結婚を迎えました。そして伊丹の部隊で結婚生活をしていきました。

結婚生活をして五年たったとき、二人の男の子に恵まれておりました。私は妻と二人の子どもを連れ、里帰りをいたしました。元気な母親にも会うことができ、妻の里にもあいさつを済ませ、伊丹に帰ってきたその夜のことでした。深刻な顔をした妻が私にこう言いました。

「あなたが部落出身であったことを、今まで私にどうして隠していたの」

強い口調で私をなじりました。私は言葉が出ませんでした・・・。

つづく